

平成六年三月

蟹江町歴史民俗資料館

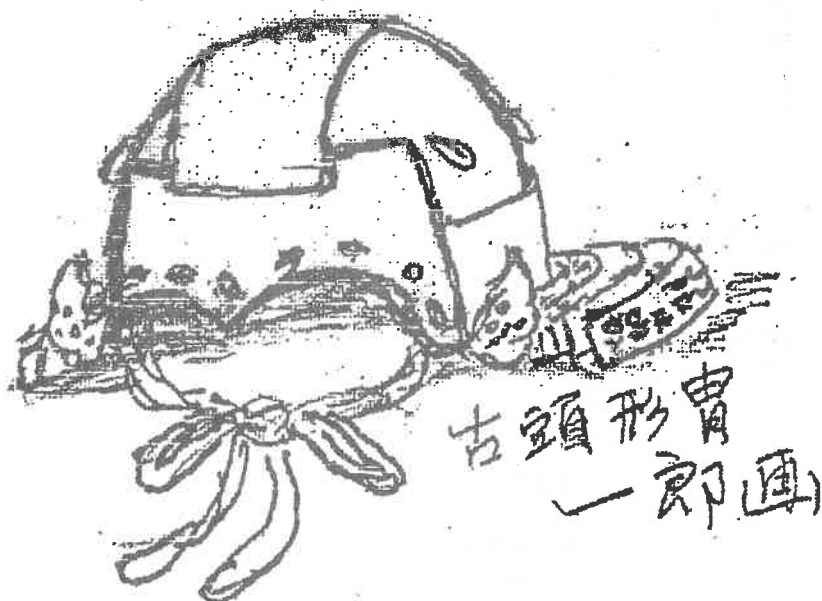
年報

第十四冊

目次

一、「沿革誌」より事業	1
二、概要	2
三、資料の収集・保管	3
四、展示	68
五、調査研究	71
六、情報提供	73
七、教育普及	73
八、庶務報告	102
九、文化財保護	104

蟹江町歴史民俗資料館 特別展示



蟹江城の戦いと武具甲冑展

期 日：平成4年10月9日(金)～11月8日(日) 午後1時
場 所：蟹江町歴史民俗資料館 1階 展示室
主 催：蟹江町教育委員会・蟹江町歴史民俗資料館
協 力：三浦一郎・武田茂敬(敬称略)

1、特別展示開催にあたり

天下統一をめざした織田信長、信忠父子が、天正10年（1582）謀反をおこした明智光秀の攻撃により本能寺に倒れ、当然後継者の地位をめぐり争いが発生した。その中で頭角をあらわしたのが、後の太閤豊臣（羽柴）秀吉であった。

秀吉は、信長死後、信長配下の有力武将の多くを得意の外交戦によりてなづけ、彼の最大の競争者柴田勝家を「賤ヶ岳の戦い」で撃破、その地位をほぼ固めつつあった。

一方、ひそかに信長の後継者を狙い、東海・中山道筋（三河・遠江・駿河・信濃・甲斐）を支配していた徳川家康は、この秀吉の動向に警戒心をもって見守る状況下であった。

両者はやがて決戦する場所を天正12年（1584）尾張地方に選ぶことになり、俗に歴史上「小牧・長久手の役」と称される戦いを繰り広げることとなった。この戦いは、単に小牧と長久手で行われた戦いではなく、その戦いに属する多くの局地戦が行われ、それぞれ各地で両陣営による陣地取り合戦が展開された。

「長久手の戦い」以後の、同年6月中旬から7月上旬にかけて蟹江城をめぐる攻防戦が勃発、後の文献では「蟹江合戦」と称される戦いは、従来この局地戦の範疇に含まれる戦いとされていたが、戦いの位置、即ち主戦場であった尾張北部での攻防とは無関係な尾張南部にある蟹江城の戦略的な地理を十分に計算された上で実行された戦いであった。この戦いを取り上げた江戸時代の文献資料も、自ら指揮をとったとされる家康がその重大さを認識し、これに対し短期決戦を目論だことが推測される記述が多く、特異な戦いであったとされる。また、『老人雑話』に代表されるこの戦いの重要性を主張する記述もあり、特別展開催に際し、関係文献資料を展示する次第である。

文献資料と同時に、今回個人蔵の桃山時代の実戦用甲冑等を特別に借用、多く現存する美術工芸的甲冑とは異なり、これら実戦用甲冑は、各細部にいたるまで、戦いに対する技術的な知恵と工夫がほどこされ、当時の合戦の内容（方法）や人々の合戦に臨む厳しさを理解する上で非常に貴重な資料である。

なお、特別展の展示及び資料作成等は、三浦一郎氏（武具研究者）並びに武田茂敬氏（蟹江合戦研究者）の協力と指導のもとに行った。

平成4年10月

蟹江町歴史民俗資料館

2、蜷江城の戦いの概要

(1) 小牧・長久手の戦い

天正10年(1582)6月2日、織田信長が本能寺に倒れ、後継者の地位をめぐり豊臣秀吉と徳川家康は、多くのライバルとの競争に打ち勝ち、天正12年(1584)には、尾張、伊勢、美濃地方周辺において、覇権をめぐり両雄が激突する機会が訪れた。俗に「小牧・長久手の役」と称される戦いである。

戦いのきっかけは、同年3月日増しに高まる秀吉の脅威に警戒心を持ち、拳兵した信長の次男信雄の要請に対し家康が、かつての信長と家康の同盟を口実に信雄助勢のため、尾張に出陣したことにあった。

家康の実力を認め、いずれ雌雄を決する必要を感じていた秀吉は、家康の行動に対抗するため、伊勢方面から信雄に圧力を加えて、美濃にあった信長譜代の重臣池田恒興と森長可を謀略し、美濃から尾張に攻撃を加える二方面作戦をとることにしたが、これに対する家康の小牧山出陣とその反撃のため、決定的な勝敗が着かず持久戦の様相をていする次第となった。秀吉は、この持久戦を打破するために、同年4月、池田の献策を採用し、池田恒興、森長可、堀秀政の他、甥の秀次に家康の三河における根拠地であった岡崎城を突かせることを決意するが、途中の岩崎城の攻撃に手間取っていたすきに、秀吉の作戦を察した家康の逆襲によって長久手で大敗、池田、森を始めとする多くの秀吉側武将は戦死する結果となった。この勝敗は、秀吉の作戦が脆くも失敗したばかりでなく、将来的に家康に対し、大きな劣等感を抱かせる結果となった。

この敗戦以後、秀吉は家康に対し、なんとか雪辱を果たすため挑発するが、これに家康は応じず、またしても持久戦となる次第で、互いに小規模な局地戦(陣取り合戦)を繰り返してはいるだけになったが、同年11月11日秀吉と信雄との和睦が成立し、口実を失った家康はそのまま本国へ帰還した。11月21日両者は家康の第2子於義丸(後の結城秀康)を秀吉の養子とすることで和睦したが、これは家康が秀吉に屈服し、臣従を意味した和睦ではなく、これ以降も秀吉と家康は互いに外交戦を展開した。天正14年(1586)家康が上洛して、秀吉に対し臣従を表するまでこの状態が続くことになった。